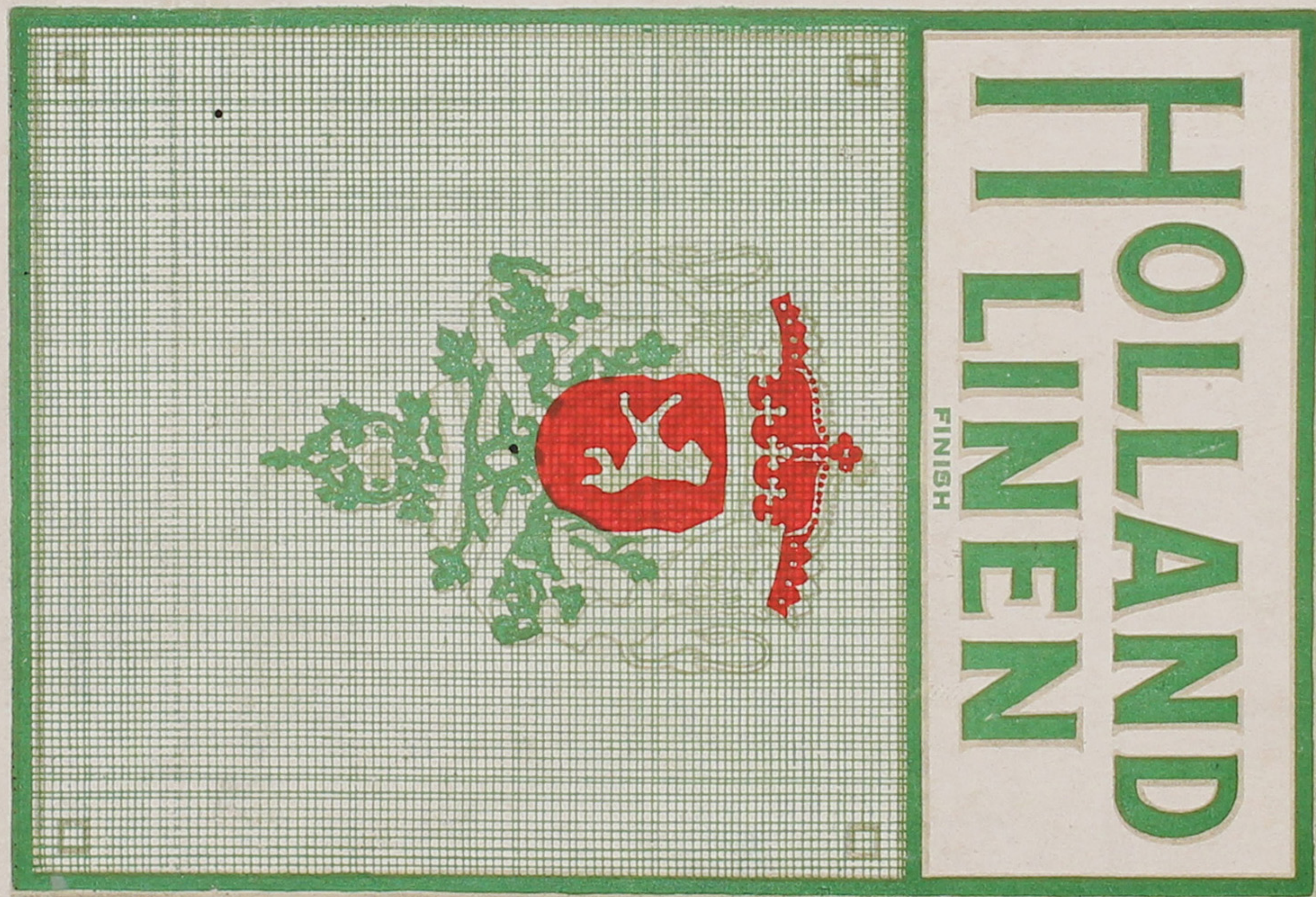


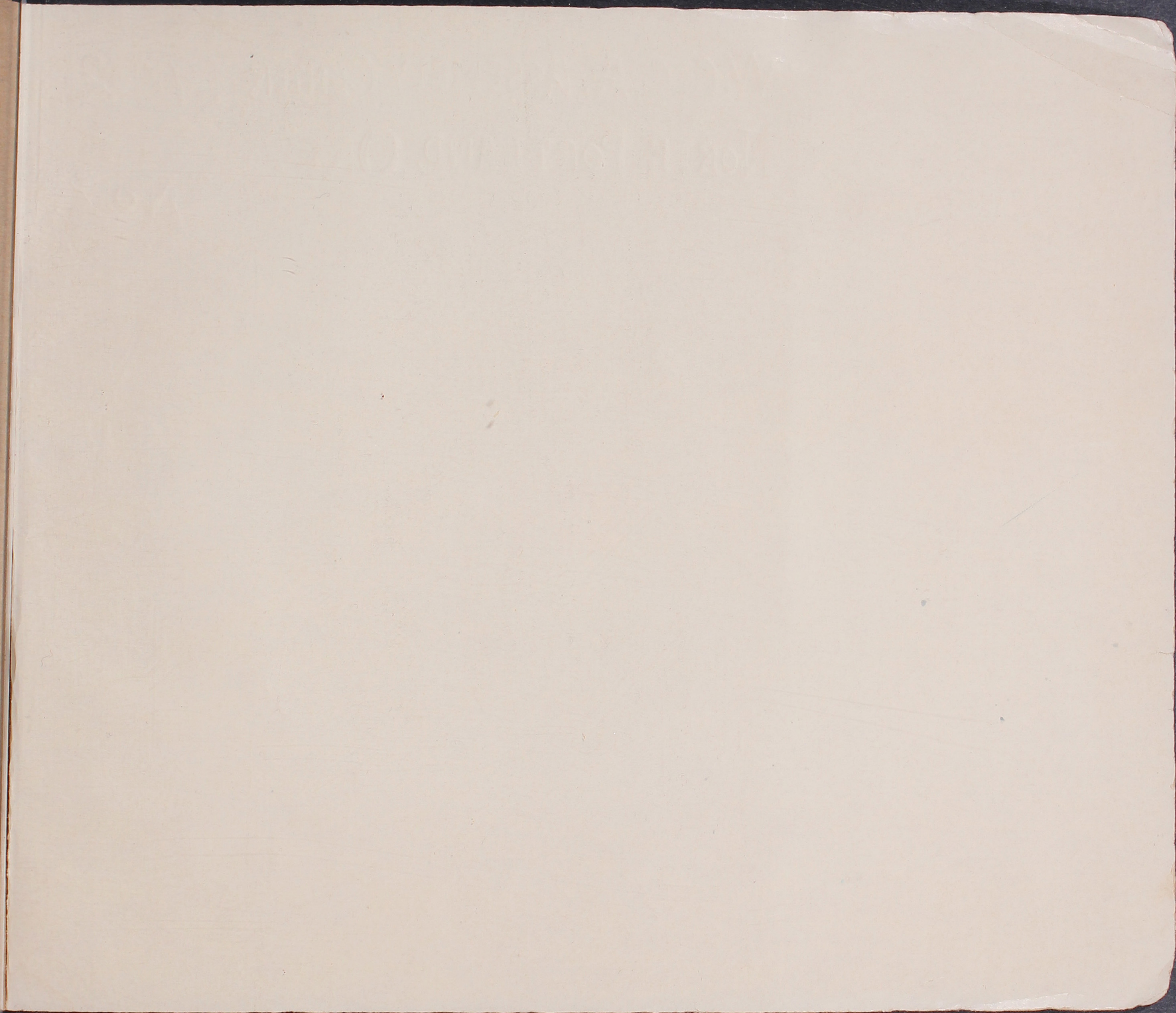
W.C.C.A. ASSEMBLY CENTER 1942

NORTH PORTLAND, ORE.

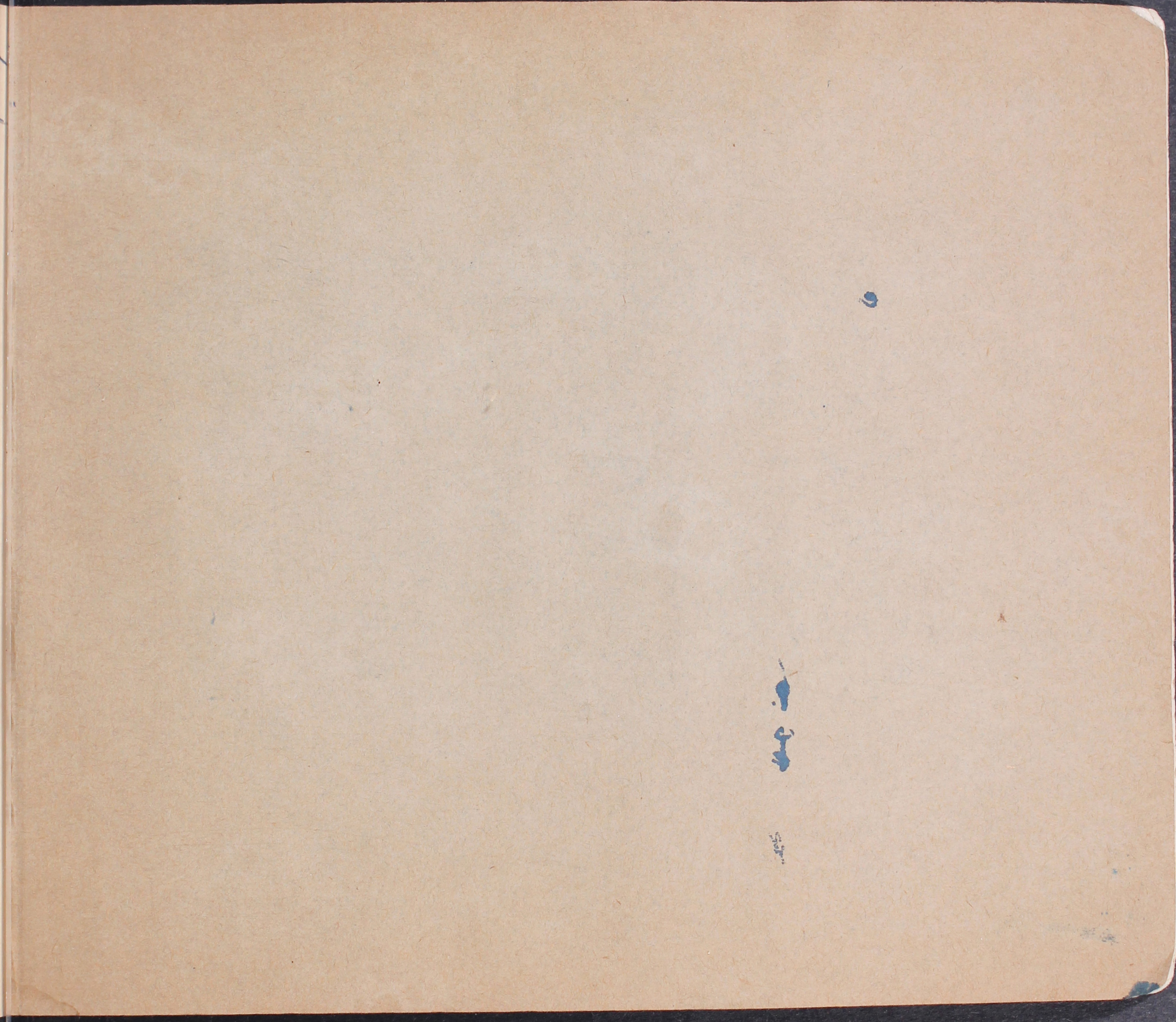
No. 2.



川柳句集  
 ポートランド吟社







課題「縁」 本多華芳 共選

天

「悪縁さねと云ふ愚痴を聞き流し」三原吾以知  
○華芳評「夢の題で剣突さんの名句として推稱された  
「夢にして女と云ふも別れる氣の同巧異曲として十三四年  
後に見出した句か天の句です。當時は餘程名句簇出  
したと見え、鈍突さんの名句「母の夢別れたまの母であり」  
も同じ題でした」

三原吾以知

地

「年齢の差もやはり縁なり甚にならず」

○剣突評「齡が違ひ過おさうかと思へ居たか何の障  
もなく田滿に行けるのもやはり縁だな」と云ふ表現  
縁かはつきり力強く現れ居ます」

人

「夕涼み席を譲つてからの仲」

清水勝水

○剣突評「席を譲つたのが根本で今は斯うした  
嬉しい仲、縁は不思議なものだと云ふ速懐です  
平易で流暢な所を頂きます」

客一

賢妻を貰ふ友の愚痴多し

南畝

客二

押賣もされず娘の縁遠さ

ひかり

客三

良縁へ母はやはり慾心あり

龍子

客四  
客五  
秀一  
秀二  
秀三  
秀四  
秀五  
秀六  
秀七  
秀八  
秀九  
秀十  
佳作

縁談があるよと母は椅子を寄せ  
 悪縁と諦め切て生き續け  
 茶柱へ縁起をつけて朝を出る  
 縁遠い娘を仲人へ嘘もませ  
 再三の縁を断る迷が解け  
 嫁婿と縁が重なる子等の齡  
 宿縁と言ふも餘りにきびし過ぎ  
 一寸した言葉木かもと縁となり  
 諦めて居れど矢張り腐れ縁  
 斯うなるも何かの縁とためられ  
 二れ迄の縁と涙の身を握り  
 無い縁と泣いてわかれた一昔  
 破れ鍋にトチブタと云ふ組合せ  
 子の無常信仰に入る縁となり  
 縁組が隣りにもある良いつ話  
 縁談が噂に上る人気者  
 再縁の話をきつぱり子の前途  
 悪縁が今日の不幸を引起し  
 續きもの又のご縁と暮を閉め  
 奇縁じやと三十年目握手する  
 收合所どちら向いても嫁ばかり

吾以知  
 初枝  
 凡岩  
 草雨  
 木魚  
 吾以知  
 しずか  
 深雪  
 一枝  
 城南  
 仙太郎  
 深雪  
 城南  
 深雪  
 凡岩  
 富田女  
 しずか  
 木魚  
 富田女  
 ひかり  
 游魚  
 白柳

天 ボツクスの棚に見事なお茶道具

牧野丁坊

○劍突評「ボツクスの棚にお茶道具の配合が非常に面白く思ひます。收合所ならでは見られぬ圖で或は作者の眼に見た実寫ではないせうか。摺み所と配合が好い」

地 故郷のどの邊と聞く懐かしさ

中貞戸久太郎

○劍突評「同郷人の懐かしさは誰も同じです。然かもどの邊と聞くところに一層なつかしさが増して来ます。東京のどの邊と聞くなつかしさと云ふ句より數等優る居ます」

人 もう聞けぬ酔った機嫌の父の唄

木下城南

○劍突評「收合所の状景がよく現れて居ます」

客一 御歸朝の便り干切れる十二月

志行

客二 訪問者土産話しに猫も出し

勝水

客三 アナンサの風邪はセンタへ知れわたり

草雨

客四  
客五  
客六  
客七  
客八  
客九  
客十

センターで仕方なく下戸になり  
注文のお金が返る品不足  
収合所 蠅の数は人も負け  
買い食いを買へて食事もあまし  
文句言ふオバサンとも喰へて居る  
収合所住めば都と云ふ感じ  
二度 三度 お召替して若くなり

紀一  
深雪  
草雨  
深雪  
丁坊  
龍子  
深雪

秀一  
秀二  
秀三  
秀四  
秀五  
秀六  
秀七  
佳作

垣の外燃ゆる火オシが瞳にしみる  
トイフレ心往くまで飛ばせたい  
収合所シガーを口に靴麻衣き  
尖月を向けて風を興意あつ煙草の火  
兒を他人に任せ編物念を入れ  
三千か夢それくの午前二時  
友情がこもる嬉しい花の色  
真夜半の銃聲かんと胸を打ち  
片言も悲さ覚へる集会所  
日の長と野球試合かやとすみ  
真相は第六感がみんな知り  
姑の腑に落ちぬは嫁の育兒法  
真夏たと云ふに雨々今日も降り  
喰へ残り集めて歸る子沢山

城南  
曲豆山  
清美  
草雨  
草村  
清美  
草雨  
草雨  
吾以知  
吾以知  
城南  
吾以知  
丁坊



第十三回句會 席吟 分別 黒川劍突選

田村深雪

天 家出した二人氣遣ふ夜の道

田村深雪

地 妻子まで泣かせ若さを持ちくずし

三原吾以知

人 分別へ妻子の智慧も借りて見る

客一 無分別 困るは家族だけになし  
 客二 分別も智慧も要らない 收容所  
 客三 無分別 されは困る後を追ひ  
 客四 無軌道を自とさる肉の落ち  
 客五 分別がついて嬉しのお茶の時

城南 丁坊 木魚 向山 草雨

秀一 夢年でこの不始末も無分別  
 秀二 失恋の我身一つをもてあまし  
 秀三 分別が大事嫁が気が嫁かぬ気が  
 秀四 分別はあらうと妻は知らぬ顔  
 秀五 分別のつげ標もなし垣の中  
 秀六 無分別それから親の悔となり  
 秀七 放浪の旅に暮らした過去を悔ひ

子山 草雨 凡岩 城南 子山 吾以知 深雪

秀八  
秀九  
秀十

分別かつき兼ねてこそこの悩み  
分別かつかず仕事に身かいらす  
行詰り思案に釣る無分別

久太郎  
仙太郎  
草雨

佳作

分別が出来て投子の送る球  
永住と歸國思案の別れ道  
分別の盛りか上の世話になり

凡岩  
草雨  
勝水

八月八日  
第十三回句會

席吟

竹簡單

互選

七点  
六六  
六六  
六六  
五五  
四四  
三三  
三三  
三三  
二二  
二二

要領を掴んだ話早く済み  
竹簡單な使りも母は又擴げ  
竹簡單に住かぬと母は義理を説く  
竹簡單に濟んでよかつた娘の始末  
一枚の皿ですごした三ヶ月  
竹簡單にせよとあちこちあくびが出  
竹簡單に出来ない話人を立て  
御馳走を一盛りにしてサレ一つ  
竹簡單な事を学者の面倒な  
竹簡單に棚もつられて新妻帯り  
竹簡單に濟む話しにも念を入れ  
結婚式向ふ昨日濟んで居る  
三千を一呑みにする一つ屋根

仙太郎  
吾以知  
城南  
劍突  
草雨  
劍突  
城南  
久太郎  
劍突  
丁坊  
鬼城  
草雨  
久太郎

二点 二点 二点 二点 二点 二点 二点 二点 二点 二点 二点 二点 二点 二点 二点 二点 二点 二点 二点 二点

結納も仲人もない收合所  
 簡単に運んだために此の苦境  
 收合所家族一向で事足らせ  
 簡単な荷だと獨身羨まれ  
 簡単に片づく筈とあせり出し  
 簡単に解決出来ぬ子の前途  
 今一度極く簡単にと座長も  
 電報へ一字もへらすべを知り  
 簡単な食事七戦勝通し  
 簡単に大關負けて鯨の聲  
 キコホンを出せば泣き止む子の嫉妬  
 心配は御無用なりと安く請け  
 入れ乱る仕合も後の一三三  
 不意の支那満面のまの簡単者  
 わけもない事を女は騒ぎ立て  
 キコホんで何不足ない子望す日々  
 簡単は断られ残念に候

ぬのや  
 ぬのや  
 吾以知  
 丁坊  
 深雪  
 志行  
 凡岩  
 勝水  
 仙太郎  
 丁坊  
 草雨  
 子山  
 鬼城  
 向山  
 木魚  
 凡岩  
 木魚

八月十五日  
第十四回會

課題「癖」

本多華芳共選  
黒川劍突

天 收合所以来見られぬ父の癖」 木下城南

○劍突評「父の癖か何の癖であるかは讀む人の想像に任かしてある。酒の癖か食物の癖か何でも構はない兎に角直し難い癖が見られぬから想像が出来ませう「以来」と云ふ字が又非常に適切につかはれて居ます。何度も讀み返して味を下の如何に流暢で軽く出来て居るかを」

地 又始めますかと小言からかわれ」 三原吾以知

○評「癖と云はず(又始めますか)で小言の癖をよく表現して居ます其上(からかわれ)で癖が生きて来て居ます」

人 お極りの悪心痴も嬉しい久し振り」 横田草雨

○評「地と同じくお極りの悪心痴(で癖がハツキリ現れて居ます大体悪心痴等は聞き度くないのか(久し振り)で嬉しい情を表現し癖を生かして居ます」

客一 直したい癖か其儘歳を取り 鬼城

客二 そら白々と云はれ右へ握り変へ  
客三 子が真似をしますと癖を叱られる  
客四 妻の留守それから甘え癖をつけ  
客五 何を云ふ今始まった事ではなし

草雨  
草雨  
城南  
草雨

香一 子もみんな呑み込んで居る父の癖  
香二 癖が出てコーチなかく骨が折れ  
香三 目を丸くする癖あつて親しまれ  
香四 指を吸ふ癖もなつかし幼い日  
香五 酒癖の悪さも似たと母の悪疾  
香六 右下り昔の儘の友の文  
香七 酒癖のもう見られない收合所  
香八 妻の癖子が出来てから自立して来  
香九 頼まれもせぬに出しゃばりたがる癖  
香十 黒髪へ勿體なくも鏡をあて

草雨  
丁坊  
紀一  
城南  
深雪  
龍子  
丁坊  
城南  
凡岩  
草村

佳作

親しきはどんな癖でも氣にならず  
母の愛あんな癖の子も直り  
早起きの癖も嬉しい親譲り  
癖もなく素直なだけに母愛ひ  
子の癖へフト思ひ出す幼き日  
念佛を以て癖にして祖母の曰々  
泣癖に又引かる氣の弱さ  
此の癖が死ぬは直ると聞き流し

ひかり  
吾以知  
草村  
丁坊  
深雪  
吾以知  
露昌  
久太郎

佳作

人知れず我子の癖へ母なやみ  
癖がき明日へくへとものかのい  
洋食の後へ茶漬を恋しかり  
下なる癖難しい役買え出る  
すねる癖母は婚期へ結ひつけ  
眩すきを又も女房の箸が突き  
三ヶ月二人の癖が出る時分  
キエボンへすねる上なる癖が出来  
癖のない出来たと奥言めて二三杯  
小娘と思へぬいな癖がき  
一癖が目立ち誰れにも知れ渡り

ひかり  
丁坊  
しずか  
豊山  
紀一  
木魚  
城南  
凡岩  
鬼城  
凡岩  
志行

八月十五日  
第十四會句會

雜詠 本多華芳選

天。生寫しあの子の世思思はせる

本田志行

地。鉢合せ御免と言つて見れば妻

登森木魚

地。行く先が何處であらうと子等の口々

貴戸久太郎

人。一悶着は取り直させて行司無事

登森木魚

人。二、扉なしの生活續けて愚痴も出す

雨路木露昌

人の三、の友達と行え洗濯持らう

横田草雨

客一

子の故郷た悪くなれとも祈られず

吾以知

客二

新婚はしんみり食事して見たい

一枝

客三

トリーキンが財布の底ひまだ光リ

露路昌

客四

フアボールを逢てドクッ落ち

丁坊

客五

センターに迷子札も影が消え

城南

客六

日曜の朝を静かにピアノの音

木魚

客七

盆裁も此処では甘庶で間に合せ

一技

客八

ババの守り急所急所かのみこめず

城南

客九

罷める氣で居た日初めて一句抜け

仙太郎

客十

壁越しに挨拶してる國訛リ

城南

秀方

子を呼べば此日盛りを砂の上

城南

秀方

三ヶ月長所短所が判り初め

草雨

秀方

往く先は何処でも矢張り垣の中

青苔

秀方

荷造へあきらめた物一つ出る

丁坊

秀方

寝苦しい床を火うす蚊が一つ

草雨

秀方

センターの生活子供が欲しくなり

露路昌

秀方

ようやくと歩けて母の忙しさ

城南

秀方

住み馴れた頃へ移動の噂も立ち

草雨

秀方

外見をかざるに親の氣もつかれ

ひかり

秀方

ビッグニュース話一日えればかり

丁坊

秀方

やられたと思ふ瞬間襟十字

青苔

秀 秀

箱棚に蔭睡もある子の窓裏  
獨り者わぐらへ急ぐ身を見る  
劍ヶ峯捨身土俵へときの聲  
家出して叱つた親を恋しかり  
耳よりな話勿体つけらるる  
未だ勝てる喧嘩の子供震へてる  
餓鬼大将負けて相撲場ときの聲  
上下もない生活へ苦を忘れ  
其時は其時として今日は今日  
杜がしい程趣味に居る有難さ  
スクールも老若男女入れ乱れ  
借金か皆んな押へる作の出来  
有り餘る暇へ自紙の暇もなし  
流行と言へば妻返は、かむり  
命日へ心ばかりの自向草  
やかましい等とは無理な收合所  
諦めてさびしい父の深呼吸

丁坊 豊山 青苔 草雨 吾以知 露昌 曲豊山 露昌 草雨 吾以知 一枝 鬼城 凡岩 凡岩 深雪 深雪 深雪

佳作

ピッチャーへランナー鋭き目の配り  
角力取り敗けた笑顔を惜しまれる  
引越しは尾を振る大を撫でいる  
ちさいのにもう口紅で男連れ  
悪戯兒目も離されず毛糸編む  
あの邊が旧家と云はれのび上り

丁坊 露昌 丁坊 丁坊 ぬのや 勝水



清らかな心も知らず世間の  
巻煙草ベッドの上で味の良さを  
一世の執力やほり敷くまけ  
食物の相場を忘れる假住居

八月十五日  
第十四回句會 席吟「覺悟」 互選

七点 覺悟して居ても刹那をチトあはて  
六占 十萬が覺悟して居た今の位置  
五占 子の覺悟母に嬉しい旅便り  
五占 覺悟した程でなかつた今を謝す  
四占 萬一の覺悟をしろと妻へだけ  
四占 もう妻も万事覺悟へ愚痴はやみ  
四占 それとなく父は遺言狀を書き  
三占 覺悟よし日頃の訓へ役に立ち  
三占 絶對の覺悟で上る施術臺  
三占 成行きに任す覺悟の荷を締める  
三占 不自由は覺悟しなから愚痴が出る  
三占 腹を切る氣で大命の先を打ち  
三占 覺悟していなからもしやに望み持ち  
三占 覺悟して居ても未練が夢となり  
二占 覺悟さへあれば世渡り苦にならず  
二占 腹のない人の覺悟は口ばかり  
二占 やわらかい妻に覺悟が又とかれ

草村  
勝水  
仙太郎  
仙太郎

劍突  
城南  
しずか  
吾以知  
城南  
紀一  
木魚  
久太郎  
紀一  
草雨  
仙太郎  
ひかり  
草雨  
子山  
丁坊  
勝水

二点 子の寝顔見た瞬間に気が弛み  
 二点 覚悟さへあれば不審は軽くなり  
 二点 決心をして一人の子旅に及ぶ  
 二点 覚悟してゆけば案外無事な顔  
 二点 覚悟して居れば出癖は悪心癒こぼれ  
 二点 覚悟して家出はしたか子の前途  
 二点 覚悟した勘當ひるむ年をとり  
 二点 二重國持た二世の分岐点  
 二点 その覚悟ありて男の顔が立つ  
 二点 覚悟して居ても移動に気が尖る  
 二点 そんな事覚悟の前と聞き流し  
 二点 犠牲球貴重なる得点一つ入れ  
 二点 覚悟した筈に行先案じられ  
 二点 覚悟した友を後から追ふける  
 二点 革命期明日へ覚悟の無我に居る  
 二点 共に死ぬ覚悟四千里こへ来た  
 二点 どうせ斯う成ると覚悟はしたもの、  
 二点 全財産出して布教の腹を決め  
 二点 斯うすれば斯うなるものと知る悲哀

仙太郎  
 木魚  
 深雪  
 深雪  
 茅村  
 茅村  
 女のや  
 凡岩  
 城南  
 草雨  
 志行  
 茅村  
 凡岩  
 紀  
 勝水  
 志行  
 仙太郎  
 志行

八月十五日  
 第十四回句會

席吟得意  
 黒川剣突選

天  
 優等の切り抜き記事をも又も出し  
 新井仙太郎

地 御得意の捨身へ世鬼眼を丸め桑田凡岩  
人 子の前途得意の道を選ばせる 荒井しずか

客一 對抗で初めて見せた師の妙技  
客二 強敵に得意の技を封じられ  
客三 お得意の技術センタへ種を蒔き  
客四 満面に笑を浮かべて仁王立ち  
客五 引き組んで得意の技かものと言ひ

城南  
子山  
久太郎  
久太郎  
芋村

秀一 收合所コック得意の腕を見せ  
秀二 一枚を背負て立たゴールイン  
秀三 観衆の拍自得意へなりやまず  
秀四 子に掴いたラチオニユスを持ち廻り  
秀五 お得意を無くして渡す親譲り  
秀六 苦心した飛行機とんで子の得意  
秀七 注文の車届って子の得意  
秀八 決勝戦投自得意のカブを出す  
秀九 ホムラン拍自の裡に一廻り  
秀十 好きな曲頭で弾いてる扉の外  
秀十一 失敗は得意の後へ何時もつき  
佳作 謙遜を得意に見せて大拍自  
三千へ美聲を聞かす咽喉のよき  
咳一つそれから得意の聲になり

吾以知  
深雪  
紀一  
丁坊  
深雪  
丁坊  
丁坊  
ぬのや  
丁坊  
草雨  
芋村  
木魚  
深雪  
凡岩

佳作

天取た歸り得意の立設  
名投自立ては拍手に迎へられ  
お揃ひか子等に得意な三輪車  
お得意な曲へ思はず足拍子  
獨唱の子はアリツタケ聲を出し

草雨  
吾以知  
しずか  
草雨  
久太郎

課題 『寫眞』 本多華芳選

天 犬望は旅券の寫眞だけが持ち

地 眠 睨<sup>眠</sup>と見る指紋の横に在る寫眞 三原吾以知 横田草雨

人 召し替を待つ間アルバム放り出され 清水勝水

客 無料で見ると活動にさへ不平あり 城南

客 此の寫眞迄が俺等の花だった 草雨

客 金婚の寫眞も添へた父の齡 志行

客 奥称と言はれ初めがこの寫眞 木魚

客 平和まで逢へぬ寫眞の子と語る 吾以知

客 顔も自らも皺が寄つて父は齡 木魚

客 寫眞だけ外には要らぬ形身分け 凡岩

客 レントゲン乳房は消えて肋骨 向山

客 替へ魂でないと寫眞が云ひ抜ける 露昌

客 封切れば寫眞もあつた大騒ぎ 吾以知

佳作

寫眞機があればと思ふ子の笑顔

寫眞では父も優しい美しい男

此の言へば笑ひ出しさうな寫眞なり

無料と云ふ活動文けに霧や雨

常ならば寫真さうものを誕生日

草雨

城南

仙太郎

丁坊

しずか

佳作

在りし日の寫眞折々そつと出し

思ひ出の寫眞取出し一人笑み

嫌だわと逃がて其笑撮らせる氣

荷造りへ寫眞見付け身を休め

旅に居る夫の寫眞へ話しかけ

とき父の寫眞を見ては悔いる吾

指紋帳出して寫眞へ笑ひ合ひ

フルーアのどれもこれもが氣に入らず

若き日の思出つゝる寫眞帳

アルバムへ幅を利かせる子等のもの

引裂いて捨てた寫眞は尙未練

カメラから覗く寫眞は直つ逆さ

こんな筈でなかつたと見比べる

寫眞撮る娘の召替は小半日

苦学生時代の寫眞色もあせ

につこいと笑つたせつな旨く撮り

家出した寫眞へそつと母祈り

寫眞婚して婦人ホームへ泣き入れ

お寫眞で見たと知らない人の文

仲人へ渡す寫眞は選りに選り

アルバムを採してパパを云ひあてる

望まれて寫眞へ撮る嬉しい日

生地のみ、寫つた我にチト不平

初孫の顔が撮れなかつた不足

ひかり

一枝

城南

丁坊

城南

子山

勝水

仙太郎

しずか

城南

久太郎

草雨

深雪

城南

丁坊

ひかり

草雨

ぬのや

仙太郎

丁坊

木魚

久太郎

勝水

ひかり

繪も書けて矢張り寫眞師趣味に居る  
由證の寫眞見付けて謎かつけ  
子の財布裏へ見知らぬ娘の寫眞  
俯に落ちぬ寫眞へ妙にからみつま  
こつそりと寫して見たい水泳着  
コタツクがあればと思ふ子等の日々  
五つ兒の寫眞在界の隅で無事  
寫眞はわかからぬ妻もそうだった  
傳れぬ顔が寫つたレジスター  
祖母さんは孫の寫眞を持ち廻り  
愛妻の形身となつた此の寫眞

吾以知  
久太郎  
吾以知  
木魚  
青苔  
城南  
志行  
草雨  
一技  
豊山

相撲句

左の取組は草芳、劍突は預らず四本柱の草雨瀬  
吾以知瀬、志行瀬、木魚瀬と志行司城南が擔任  
いただきます但瀬取自身登場せし場合は其選に預らず  
○印勝星 ●印負星 △印引分け  
生きて居るやうに寫眞に話しかけ  
ありし日の吾が子の寫眞今日も出し

久太郎  
仙太郎

○東  
○西

寫眞機があればと思ふ子の笑顔  
寫眞機が欲しい近頃子が肥る

草雨  
勝水

○東 寫し繪を形身に今は生き別れ  
深雪  
○西 愛妻の形身となつた此の寫真  
豊山

○東 お見合の寫真は涙糸に仕上げられ  
深雪  
○西 お見合に送つた寫真氣にかゝる  
一枝

○東 奥称と言はれ初めがこの寫真  
木魚  
○西 此の寫真迄が俺等の花だつた  
草雨

○東 在りし日の寫真折々そつと出し  
ひかり  
○西 思ひ出の寫真とり出し獨り笑み  
一枝

○東 母の髮寫真に残る二〇三  
城南  
○西 母の額二度目の髪曲の細りよう  
志行

○東 コダックがあればと思ふ子等の日々  
城南  
○西 誕生に寫しやり度いキヤメラなし  
仙太郎

○東 無料といふ活動だけに霧や雨  
丁坊  
○西 無料で見ると活動にさへ不平あり  
城南

華芳 能くも揃ひ揃つて斯んなまつい句を作つたもつとつくぐ感心しました  
劍突 — 二んな句をツルレキ吟社へ送れるか？ 華芳「まあさう云ひ給ふな  
まついのお見せしおんへまじえれど諸君の歌を送る事に致しました  
其実私共への歌です」重ねて言ひます餅くも百六十余句斯んなまつい  
句を作つた諸君の熱心さに感心致しました。



天 いらみ合ひいつまで續く子等の前」 登森木魚

○劍突評「腹の中ではポンく怒る居ても子等の前では  
いらみ合へは居られますまい「いつまで續く」が非常に面白い  
表現で多少皮肉の觀察があります恐らく実感句でせう」

地 夕涼み日本人みな日本語」 牧野丁坊

○評「收合所の夕涼の実感句で「日本人みな日本語」が  
非常に新らしく面白く思はれます。二世の夕涼でない所が  
現れて居ます」

人 初聲を待つ向母親落付かず」 木下城南

○評「娘のお産を心配してる母親の真情が  
良く出て居ます」

客一 湯上りの浴衣が通ると眞晝向

草雨

客二 口笛も淋しい時の足しになり

志行

客三 又今日も仕事の前に見る野球

吾以知

客四 洗濯場チヨツピリ何か匂って来る

龍子

客五 贅具澤をして居た称な口を利き

深雪

客六 新婚へ要らぬ噂を立てたがり

ひかり

客七  
客八  
客九  
客十  
客十一

食堂の西瓜は厚く残される  
母にだけ逢ひたくはない獄の子  
また會へる田を樂しみに身を握り  
見ながらに見ぬふりをする 收合所  
立退の群へ山積な寫眞班

草雨  
丁坊  
木魚  
游魚  
草雨

秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃  
秀乃

寝もやらず母はダンスを待つて居り  
大男孫の子守で日を暮らし  
永劫の地上に人が住み替り  
人通り忘れ邪魔な立話し  
一世の氣持は歸来だけに知れ  
立退の荷は淋しいか母かあり  
身も口もよく動かして夕涼み  
雨なりと風なりと吹け今の我れ  
初聲に家中ホット安堵する  
食事時だけが静かな大通り  
氣の早い母はほつくと荷を纏め  
打解けて見れば可笑しいあの当時  
移動地も極り別れる日がせまり  
一枚のレタペーパーへ盛る情味  
炎天に投ずる汗を拭き  
親しみを兩地に分けて無情なり  
砂遊びボーイ矢張り意地を出し  
浮世なり親しき友とまた別かれ

木魚  
深雪  
向山  
ひかり  
仙太郎  
草雨  
深雪  
凡岩  
城南  
深雪  
一枝  
草雨  
吾以知  
龍子  
城南  
久太郎  
城南  
豊山

秀 八毛ニ方にチンキヤンまでも踊り出す  
秀 移動地が意外や友と別となり  
秀 感激の涙で送るドイツ行き  
秀 命令へ秋が来たよな収合所  
秀 センターで命名札もなつかしい

豊山  
吾以知  
城南  
城南  
城南

八月廿二日  
第十五回句會 席吟、別れ  
黒川剣突選

天、送る目と送らる目と垣根越し  
田村深雪

地、初恋のみあらぬまゝに西東  
溝又ひかり

人 豫期しない丈けに別れの悲し過ぎ  
三原吾以知

客一 別るれば逢ふ樂しみの一つ殖へ  
志行

客二 長旅へ恙がなかれとのみ祈り  
深雪

客三 夢にして別れるにチト未練あり  
城南

客四 動揺めきの別れのあとの淋し過ぎ  
丁坊

客五 わきまへて居たに汽車站でホロリする  
城南

客一 逢ふ迄を夢で語らう趣味の友  
草雨

客二 別れた子に袖を引かれとすのみ  
栗田

客三 ぐどバイ耐へた涙せきをきり  
芋村

客四 お馴染となつて別れるのも運命  
深雪

客五 もう逢へぬ覺悟で強く手を握り  
丁坊

客六 今此処で別れするには親し過ぎ  
吾以知

秀七 縁あらは又會ひませうと身を握り  
秀八 折角に親しくなつてこの別れ  
秀九 命令を素直に受けて西東  
秀十 年頃へ母の氣配り別れ際

城南  
丁坊  
深雪  
丁坊

「汽車が出る迄を淋しく笑ひ合ひ」  
「軸」

黒川劍突

八月二十日  
第十五回句會 席吟 迷ひ 互選

四點 免や斯うと決まらぬまに子の育ち  
三點 人生の迷路に立つて未だ覺めず  
三點 成行に任す心の静かなり  
三點 迷ひから覺めた時分に身はきかず  
二點 諸道具を賣りて明日の世に迷ひ  
二點 五十年迷ひついで生きて吾れ  
二點 奥地から人称々な便り聞く  
一占 行詰り行詰りして迷ひ出し  
一占 娘の迷導く母にそむかれず  
一占 迷信と思へど矢張り身を合はし  
一占 永住も歸國も着かず日か過ぎる  
一占 何だ彼だ迷はず称な口計り

城南  
城南  
吾以知  
城南  
茅村  
丁坊  
深雪  
茅村  
露昌  
茅村  
露昌  
吾以知

一点

我が意志を徹せば親の縁が切れ

草雨

一点

我が迷ひどころか子等に迷はされ

露昌

一点

迷から覺めて取入る事はかり

劍突

一点

戸迷ひもやつとせぬ頃移動なり

吾以知

一点

髪に霜迷ひの夢かやつと覺め

深雪

一点

出稼ぎの子は歸らぬに移動令

草雨

一点

濡れ衣の途方に迷ふ夢の中

草雨

一点

さ迷へる羊となつて年を過ぎ

丁坊

八月廿二日

第十五回會

課題「疑」

本多華芳 黒川劍突 共選

天

亡き骸へ神を疑ふ母となり」

牧野丁坊

地

母丈は信じてくれる有難さ」

登森木魚

地

掛せられえからは其身を油断せず」

横田草雨

人

理屈は勝てぬ嫌疑が降りかり」

三原吾以知

人

寄り世帯親しい仲も油断せず」

貴戸久太郎

人

成程と言つてパイプの横銜へ」

三原吾以知

續き

疑

客一 あれ以来じつと見守る娘の素振り  
 疑へばそれから それと後が出る  
 客二 どうだかと妻は獲物をしらべてる  
 客三 ひよつと若し子心はないかと考へる  
 客四 辯解を聞いてなるほどなと思ひ  
 客五 疑ひを馬鹿と貶せぬ点もあり  
 客六 いっはれぬ日記 どうだかつき出され  
 客七 親切の程度へ妻の口が觸れ  
 客八 一應はたしかめてから書く返事  
 客九 信じてはいても素振が氣にかかり  
 客十

木下城南  
 清水勝水  
 藤井清志  
 三原吾以知  
 桑田凡岩  
 西田紀一  
 牧野了坊  
 三原吾以知  
 登森木魚  
 貴戸久太郎

秀一 傳説の小町の身體疑はれ  
 秀二 古話しいやな眼付が通り過ぎ  
 秀三 疑はれながら辯解出来ぬ位置  
 秀四 若しやとは思へどやはり友は友  
 秀五 そう言へば合點の行かぬふしもあり  
 秀六 言ひ譯を作て歸る夜更道  
 秀七 移動先き地圖へ不安な眼が集ひ  
 秀八 疑へば限りなき世を清く活き  
 秀九 僕もそう聞いたか君はどう思ふ  
 秀十 ちうなうで納得をせぬキヤンテ箱  
 秀十一 寝過してビツクリ時計疑ぐられ  
 秀十二 兄妹と知らず世間のうるさい目

清志  
 凡岩  
 木魚  
 龍子  
 ひかり  
 深雪  
 しずか  
 城南  
 草雨  
 ひかり  
 久太郎  
 深雪

秀十三  
秀十四  
秀十五

此の頃の妻の <sup>そぶ</sup> 腑に落ちず  
疑られながら届いた荷のくびり  
考へて見ても話かよさ過ぎる

城南  
露昌  
草雨

佳作

凡岩

佳佳

志行

佳佳

凡岩

佳佳

志行

佳佳

城南

佳佳

向山

佳佳

凡岩

佳佳

城南

佳佳

木魚

佳佳

凡岩

佳佳

紀一

佳佳

久太郎

佳佳

向山

佳佳

草雨

佳佳

久太郎

佳佳

一枝

佳佳

深雪

佳佳

吾以知

佳佳

仙太郎

佳佳

青苔

人格に接し疑向は影を消し  
念押ししてそれから女なにか塗り  
濡れ衣を超然として太っ腹  
朝歸りもしやと思ふ程静か  
絶交の友へもしかと思ふ節  
どうしたか今朝の妓のこの機嫌  
保険屋は石油のキヤンへ目が光り  
疑ひも暗れて甦生國のため  
自向取ったわけが何たか腑に落ちず  
此の頃は會ふ度に横へ外れ  
戦勝のニス其儘受取れず  
優遇かいつまで続くことじややう  
宿帳へ同じく妻の化粧やけ  
月足らず近所の方が騒ぎ立て  
純情も知らずうるさい虫向の眼  
スクールへ母は後から見えかくれ  
よく見れば義妹だった胸をなで  
疑はぬ人へ欺むく氣になれず  
疑ひのある無し向はず收容し  
娘の腹か思ひなしかは太く見え

凡岩  
志行  
凡岩  
志行  
城南  
向山  
凡岩  
木魚  
城南  
凡岩  
紀一  
久太郎  
向山  
草雨  
久太郎  
一枝  
深雪  
吾以知  
仙太郎  
青苔

佳佳佳佳

許可すればよいかと祈る請願書  
そつと出た娘へ若しやとあとも子  
聞ッて見て初めて解けた靴の跡  
ポイントはともに掴めぬ倦怠期

草雨  
豊山  
一枝  
向山

August 29-1942 at N.C.C.O. Assembly Center  
North Portland, Oregon.

ヤキマ地方及ポートランド地方柳友譜氏と  
お別れに際し寄書及別れの句 (順序不同)

本多華芳

わかまを許してくれたありがたさ

黒川劍突

汽車が出る迄を淋しく笑ひ合ひ

尾上向山

荒れ狂ふ風の行舟は幾千里

三原吾以知

別れとも心は常に通ひ合ひ

横田草雨

お別れと極り親しき増すばかり

本田志行

お別れになるとも知らず無理ばかり



夢ならばよいかと思ふ別れ際

木下城南

登森木魚

ま、ならぬ別れを惜しむ今日となり

田村深雪

お別れの言葉涙にとぎれ勝ち

小田切美涼

別れても心は一つ旅の空

齊藤龍子

明日がある今日の別れへ強く立ち

登森雅子

名残惜し言葉もなくて身を握り

溝口ひかり

また逢へる日へお互を祈り合ひ

荒井しずか

荷作りもつきぬ名残に鈍りかち

村端一枝

お互に名残はつきぬ汽車の窓

石山すみ子

川柳がわがりが、ればもう別れ

貴戸久太郎

明日の日の期待へ今日の身を握り

村端豊山

健康を祈りますそと身を握り

お互に後は云へずに向を握る

布上女の也

も退の荷は黙々と子もからみ

伊香茅村

清水勝水

別れても三仙切舟で向をつなぎ

牧野了坊

折角に親しくなつて此の別れ

福山子山

惜別の名残はつきぬの無事を

西田紀一

家畜小屋別れともない箇所となり

伊藤南畝

短かくも葛も感籠る友言葉

露木露昌

思い出を残し別れる身をつらさ

桑田凡岩

感心無量はんに別れへつらく居る

